審査の結果の要旨

氏名　野村幸代

本論文は、高校英語教師のビリーフが読解授業における指導や生徒との相互作用に与える影響を授業分析により検討した研究である。論文は５部９章から構成されている。

第Ⅰ部第１章では、教師のビリーフに関する研究を概括し、授業分析に基づいたビリーフの検討が求められていることを先行研究から示している。続く第２章では、授業分析の方法として、教師のビリーフ分析の方法としてのインタビューの演繹的分析法、英文読解指導において読解プロセスにもとづく授業の展開と構成の分析法、教師と生徒の相互作用に関わる定量的発話分析の方法という分析方法を整理し、ビリーフの同定、授業分析による指導の多様性と生徒との相互作用の多様性の解明という本研究の問題を導出している。

第Ⅱ部第３章では、同一高校での勤続年数が異なる３名の教師への半構造化インタビューをもとに、先行研究で考案された演繹的コーディングや指導法に関するビリーフの分類を適用した分析を通して、規則ベースの読解指導ビリーフの教師と技術ベースのビリーフの教師の相違を示し、教科に関するビリーフ、生徒に関するビリーフ、生徒の学びと理解に関するビリーフなどのビリーフの重視に教師により相違があることを明らかにしている。

第Ⅲ部第４章では、３章で明らかにした異なるビリーフをもつ教師の英文読解授業の展開の特徴およびその授業における生徒の発話の特徴を読解プロセス単位の分析にもとづいて時系列にコード化分析をすることで、導入部分の違いと教師のビリーフ間の関連性、音読や展開部分で重視する処理の違いとビリーフ間の関連性を示している。続く第５章では、教科に関するビリーフや規則ベースのビリーフを重視する教師では、授業における読解活動において単語や文法指導という低次レベル技能の指導比率が高いのに対し、生徒の学びと理解に関するビリーフを重視する教師ではテキスト全体に関する発話比率が高いというビリーフと行動との関連を明らかにしている。続く第６章では、前２章で明らかにした結果が他教材授業でも検証できるかを検討し、同様の傾向がみられることを確認している。

第Ⅳ部第７章では、教師の発話の特徴を発話機能から分析し、教師のビリーフと教師の発話機能と英語使用率の間には関連がみられること、また第８章では生徒の発話の特徴をCARES-EFL 分析カテゴリーおよび英語授業発話タイプカテゴリーに基づき分析を行い、教師のビリーフと生徒の発話の特徴との間の関連性を示している。

第Ⅴ部第９章では、上記研究の総括を行い、授業分析が授業を省察する際の手がかりとなりえることを述べるとともに、本研究の限界と今後への課題を整理している。

本論文は、高等学校英語読解授業において、カテゴリー分類を詳細に行うことにより、同一教材授業の展開や構造、発話の相違を教師のビリーフとの関連から明らかにする一つの手法を提示し､英語教育の授業研究への一つの可能性を示そうとした研究と評価された。対象とした授業の限界や分析方法、ビリーフの構造へのアプローチ法等、今後深めていくべき課題は残されている。しかし、高等学校において実際の英語授業を対象に相互作用を精緻に多角的に分析した研究はこれまでになく、この点でこの研究は教育実践に寄与する可能性をもちうる論文と位置付けられた。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与する水準にあると判断された。